

私も日本の伝統である和紙の紙漉を応用し、ランプシェードを作るワークショップをデンマーク展にて担当しました。3つの日本の手漉和紙技術は2014年にユネスコの無形文化遺産に登録されています。デンマーク展では展覧会場にて食事会の招待を受け、現地特有の料理のもとに合わせ、キャンドルの明るさで演出された空間はヨーロッパならではの素敵な場でした。偶然にもワークショップの制作物が和紙原料を用いたランプシェードであり、日本の和紙文化と異国の文化が融合したようにも感じられました。参加者は思い思いのランプシェードを制作し、言葉を越えて共感する楽しさを味わいました。

わたなべひろこ氏も「日本の包みの文化と風呂敷」や、「絞り染め」のワークショップ等をし、定員を超える人が押し寄せた楽しさを分け合っていた様です。これ等の展覧会活動にTDA会員が沢山参加しているのに一般に知られていないのが不思議に思われ、私が紹介の義務を感じました。

FIBER FUTURES 展には新井淳一名会員の他に荒川明子氏、弥永保子氏、熊井恭子氏、小野山和代氏、吉岡敦子氏、わたなべひろこ氏に私、田中孝明(元会員の須藤玲子氏、田中秀穂氏)等が参加しています。

又、ミニチュールの方には上記メンバーに加えて、長沢桂一氏、奈良平宣子氏、八代利江子氏、高橋友嗣氏、渡辺三奈子氏、牛尾卓巳氏等 あわせると14人の会員が高い評価を受けている海外展に日本を代表して参加しています。TDAもデザインと云うだけでなく、インテリアもファッションもアートもクラフトも 包含して、広く人間生活を支える環境の中の大切な要素として、クリエイションし、それぞれの場で繊維産業や繊維文化の高揚と発展に貢献してゆけばよいのだと思います。私は今 あらためて会員としての自覚と自らの夢を重ね合わせて未来を見つめ直しているところです。

写真：田中 孝明

■FIBER FUTURES展の会場写真



スウェーデン展会場より

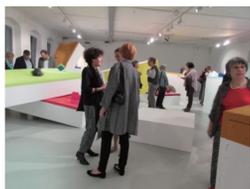


スペイン展会場より

■ミニチュール展会場写真



スロバキア展より



オーストリア展より

■ワークショップ風景



和紙原料によるランプシェード作り(田中孝明)



「日本の包みの文化と風呂敷」「絞り染め」のワークショップ(わたなべひろこ氏)

033. 伝統と新たな感性の融合

伝統的工芸品と称される分野がある。長い歴史の中で培われ、地域の人々の生活と密着しながら受け継がれてきた工芸品。何となく職人気質で高価なもの、若者に受け入れにくい印象だが、これら日本の文化に魅力を感じ、職人仕事に興味を持つ若者が増えてきているように感じる。身近なところで、滋賀県の伝統的工芸品である正藍染めに出会い、藍染の魅力にとりつかれた若者たちがいる。「ノラふく」というかわいい野良着をプロデュースしている。ノラノコという活動をしているメンバーで、自分たちの手で「つくる」ことを通じて、音楽を奏するように、自由に楽しみながら、生きる力を育て、自然に寄りそった暮らしを探る集団。このような生き方を実践し、お金は無いが豊かに暮らす若者が私の周りには増えている。

彼らは自然農でお米や野菜を育てている。農作業もお洒落にかっこよく、そんなノラノコから生まれた藍染の服を「ノラふく」と呼び、静かなブームを呼んでいる。ノラふくのファッションショーを観て、そのかっこよさに惹かれてみたい衝動に駆られ、可能性を強く感じた。トレンドとしてのかっこよさは別のオーラを感じた。

若い感性と伝統工芸の出会いが、程よい化学反応を起こした。彼らにとっては全くの新しい世界。実際に私も藍染めをするために足を運んだ。約180年に渡り守られてきた藍瓶から醸し出される色彩、染場の匂いと空気感は感動的。若者が、ここに通い職人の感性と交わり新しいムーブメントが生まれていくことが嬉しい。80歳を超えた職人が、全くの外部からの若者を受け入れた覚悟が嬉しい。次代に繋がる予感がする。

自分で丁寧に染め上げた藍染の服を着ると、不思議と守られているような安心感がある。愛着を持って長く着続けるに違いない。このように職人との交流の中で技法の本質を理解し、伝統に取り組む若者が増えることを願ってやまない。それが若者たちの楽しみから始まったとしても、結果、売れていくという仕組みになることを期待したい。今、彼らは藍を育てることを始めたらしい。技を伝授し、伝統の継承へと繋がってほしい。

彼らの思いと同じく、消費のためのものづくりをしたくはない。してはいけない。作り方、買い方を変えていかねばならない。意識と知識を変える、社会価値変革。共感できる人から、コトから始まっている。

身を守るための布から始まった衣。現代の身を守る衣とはどんな要素のものなのかを考えた時「ノラふく」を身に纏うノラノコ集団の姿と、その先の未来に求められる衣の姿が重なった。

写真：北川 陽子

